平成 21 年度　日本造園学会北海道支部大会

基調講演『北のランドスケープ・150 年の歴史に学ぶ』

俵浩三氏（専修大学北海道短期大学名誉教授）

日時：2009 年９月５日（土）14 時 00 分～15 時 30 分

場所：北海道大学クラーク会館講堂

司会：本日の基調講演には、専修大学北海道短期大学名誉教授の俵浩三先生をお招きしました。俵先生は、千葉大学園芸学部を卒業され、厚生省国立公園部、北海道林務部、北海道生活環境部で、自然公園行政に長年携わってこられました。その後、専修大学北海道短期大学で造園学の教鞭をとられ、1994 年から 2004 年にかけて、北海道自然保護協会の会長も務められました。北海道の緑や自然保護に関する多くの論文も執筆されております。昨年は、長年の研究の成果をまとめられた、「北海道・緑の環境史」を出版されたところです。本日は、「北のランドスケープ・150 年の歴史に学ぶ」という題で、北海道の都市公園や自然公園をはじめとした、緑の歴史、さらにこれからの方向性についてお話を伺います。

俵：ただいまご紹介いただいた俵です。よろしくお願い申し上げます。今日は、「北のランドスケープ・150 年の歴史に学ぶ」というタイトルでお話をさせていただきます。北海道の現在のランドスケープを考えると、その出発点となるのは、1869(明治 2)年で、それまでの蝦夷地が北海道に改められ開拓使が置かれました。それから北海道の開拓が始まり、1969（昭和 44）年に北海道 100 年記念事業が行われましたが、その出発点は 1869 年で、今年は 140 年です。

150 年前にまかれた３粒の種子

あえて私が、150 年ということで、それより 10 年前に遡った 1859 年としたのはなぜか。今年函館が開港 150 周年ということで、函館にちなむ記念切手が出ております。函館の開港が 1859 年。ダーウィンの進化論『種の起原』が出版されたのも 1859 年です。あとでお話しますが、アメリカのハーバード大学の植物学の先生だったエイサ・グレイが、日本とアメリカの植物の比較の論文をまとめたのも 1859 年です。

この三つのうち、一番の函館の開港と、三番のグレイの植物比較論は、密接に関わっています。なぜかというと、函館は、ペリーの黒船の来航によって開港されましたが、グレイの日米の植物比較論は、黒船が函館で採集した植物に基づいてグレイが日本の植物は面白いと、比較を試みたものです。ダーウィンの進化論はもう言うまでもないことですが、北海道の、というよりは、全世界、特に欧米先進国での自然観がそれから発達して、私たちの現在の自然観につながっています。実は今回、このお話をするということで、『種の起原』を詳しく読んでみたら、その中に、函館の植物のことを指しているに違いないと思われる部分を発見しました。『種の起原』は、北海道と関わりがある部分がある、もちろんこれは大筋とは関係ない、小さな部分ですが、それでも北海道と関わりがあったと気付きました。そんなことを含めながら、北海道の緑の環境はど

んな特徴があるのか、どんな変遷をたどったのか、ということをお話させていただきます。

ダーウィンの進化論

『種の起原』は 1859 年、それに対して『人間の由来』という本は、ちょっと遅れて 1871 年に書いています。なぜこれが遅れたかというと、当時は、キリスト教的な旧約聖書の教えにより、人間は神様がつくって下さったのだという、考え方が支配的だったため、人間はサルから進化したということを言うことは当時タブーだったわけです。ダーウィンはそれを心配して、『人間の由来』は後から発表した、と言われています。

それでは、キリスト教的な天地創造論と進化論は人間と自然の関係でいうとどこが一番違うでしょうか。ダーウィンの進化論をもじって、サルがプラカードを掲げている漫画があります。 “AM I A MAN AND A BROTHER ?”と、“私は人間でしょうか、そして人間の兄弟でしょうか？”と、その漫画に皮肉って描かれています。その漫画を見た多くの、特にイギリスの人たちの、冗談じゃないよ、進化論なんて冗談じゃないよ、という思いが込められた漫画です。人間は神様がつくって下さったもので、他の自然環境も神様が作って下さったが、他の自然環境に対して人間は一歩上にいる、人間優位で、人間が自然を支配するのが当たり前だ、という当時の自然観がありました。それに対して、ダーウィンの進化論では、人間はサルから進化した、人間と動物の間に断絶はない、連続している、ということになり、現在の自然観はこちらの方にいっているわけです。ただ、未だに、例えばアメリカなどでは別の反応があるようです。

『種の起原』に函館の植物？

『種の起原』第 11 章の「地理的分布」という部分の中に、「グレイによると、アパラチア山脈の高山植物は、アルプスの高山植物とほとんど同じ」ということが書かれています。ここでいうアパラチア山脈は、言うまでもなくアメリカで新世界です。それからアルプスはヨーロッパで旧世界、つまり、新世界と旧世界の高山植物に共通性がある、ということを言っています。もう一か所、「グレイの最近の見解によれば、新世界と旧世界の温帯の植物は、以前の想像よりも多くが同じ」という記述があります。グレイはアメリカ人ですから、新世界の植物はよく知っています。旧世界の温帯の植物で、以前から分かっているのは、ユーラシア大陸の中でもヨーロッパです。最近の見解によれば、グレイが 1850 年代ぐらいに唱えたことであろうと思われます。「以前の想像よりも」、ということは、その時に何か新しい材料を極東地域で手に入れたと思われます。グレイはどんな材料を手に入れたのでしょう。

エイサ・グレイは、ハーバード大学の当時の植物学の教授で、世界的に有名な植物学者でした。北大の宮部金吾先生も、アメリカに留学した時にグレイから教わったと言われています。それで、グレイがダーウィンとどんな関係にあったかというと、仲が良くて、手紙のやりとりをしていたそうです。ダーウィンの進化論は、『種の起原』が出版される前の年に、大急ぎで公表することになりました。東南アジアで生物を研究していたウォーレスが、ダーウィンと同じような考えを持っていたことが分かったので、進化論の一番最初の公表は、ウォーレスの進化論、ダーウィンの方は間に合わなかったので、それ以前に書かれた進化のエッセイ、それとダーウィンがグレイに宛てた手紙、私は進化についてこう考えていますよ、という手紙、この 3 つがセットになって初めて、進化論が公表されたわけです。グレイは、ダーウィンと非常に密接な関わりを持っていました。したがってダーウィンの進化論の中でも、「グレイの見解によれば、」という所が出てくるわけです。

ペリー艦隊の『日本遠征記』をよく読んでみますと、第 1 巻が本文で、第 2 巻が資料編ですが、その第 2 巻に、黒船が採集した植物のまとめがあります。そのまとめをしたのがグレイです。ペリーの黒船が函館に来たのは新暦 5 月ですけれど、北海道の 5 月はエンレイソウが咲いています。チゴユリが咲いています。ユ

キザサも咲いています。乗組員が、函館でこういうものを見て、あぁなつかしいなぁ、ふるさとの植物と同じ、ふるさとを思い出す、と手記に書いています。その標本がグレイによって鑑定され、函館で見つかったエンレイソイウは、アメリカにあるエンレイソウと同じだ、と当時グレイは判断しました（現在は別種）。それから、チゴユリはアメリカにあるものと同じ属の新種、ユキザサもアメリカにあるものと同じ属の新種、と記載しています。グレイは、前書きで、「アメリカの植物学者にとって、外国の植物で日本ほど興味のある所はない」、と書いています。つまりここで、先ほどのダーウィンの『種の起原』で言う「最近の見解によれば」というのは、ペリーの日本遠征記 1856 年、ここの部分を指している、と私は解釈したわけです。

グレイによる日米植物比較論

エイサ・グレイはたくさんの論文を出していて、サージェントという人が編集して、読みやすく抜粋したものが出版されています。このサージェントは、1892（明治 25）年に札幌へ来て、宮部金吾先生のご案内で藻岩山へ登りました。藻岩山が狭い面積の中にいろんな種類の樹木が多様であり、世界的にも珍しいという折り紙をつけてくれたのが、サージェントです。アーノルド樹木園の園長でした。私たちが北海道でお花見をするのはエゾヤマザクラ（オオヤマザクラ）ですが、その学名が、*Prunus sargentii* です。サージェントにちなんだもので、グレイの論文をまとめたサージェントも北海道に深い関わりがあります。

グレイの論文で、日本の植物について書かれている部分ですが、ここで何を言っているかというと、日本と北アメリカ東部に共通する植物は、日本と北アメリカ西部や、日本とヨーロッパ西部に比べて、はるかに多いということです。当時、まだ日本の植物がたくさんは外国に知られていなかったけれども、江戸時代のシーボルトやケンペルなどが集めた植物と、黒船が持ち帰った植物、全部で 580 種ですが、それらを分析したらそうなったというのです。

ヨーロッパになくて、アメリカにある植物の属のうち、日本にもみられる属の暫定リストを見ると、大部分は、日本とアメリカ東部に共通しており、アメリカ西部とはそれほど共通してない。つまり日本とアメリカ東部に隔離分布をしている植物が多い、とグレイは言いました。その隔離分布は、たぶん昔の地質学的な歴史と関わりがあるだろうと指摘し、現在は、第三紀周北極植物群という理論として成り立っています。

図は、函館で採集されたチゴユリの標本です。これが、グレイによって学名がつけられたタイプ標本になっています。左側は、チゴユリが東アジアとアメリカ東部に隔離分布している地図です。これは現在の知識に基づく分布範囲で、グレイが初めて指摘したときは、函館という点と、アメリカの東の方だけの分布だったわけです。いずれにしても、北海道の植物は、アメリカ東部と非常に似ているということがクローズアップされたわけです。

第三紀周北極植物群という現在の理解では、第三紀、今から数千万年前の頃は北極周辺はわりに温暖な地域で、メタセコイヤ、トウヒ、ハンノキ、カンバ、カエデ、シナノキ、ブナなど、現在私たちが北海道で見る植物が分布していたと考えられています。メタセコイヤは、再発見されたものが今も植えられています。その後、第四紀に、氷河時代に入って気候が寒くなり、南の方に逃げた時に、アメリカ東部に南下したものは多くが生き残りました。アメリカ西部の方は、死んでしまったほうが多かった。東アジアでは、生き残っ

たものが多いのです。ヨーロッパの方は、完全に全滅してしまいました。なぜ、ヨーロッパでは全滅したかというと、アルプス山脈が東西にはだかっていたので、南の方に逃げることができなかった。ところが、アメリカはアパラチア山脈やロッキー山脈は南北方向で、日本列島も南北方向で、南へエスケープする道があったわけです。なお、ヨーロッパでは一度絶滅したが、現在似たような植生がみられるのは、ここ一万年ぐらいの間に回復してきたもの、と解釈されているのが現在の理解です。

進化論の普及に貢献したヘッケル

次に、ダーウィンの進化論はその後どんなふうに発達したか。特にヘッケルは、皆さん名前を聞いたことあるかと思います。ヘッケルが進化論の普及に大きく貢献しました。イェーナ大学の動物学の先生で、今日も皆さん必ず耳にされる言葉で、“エコ”という言葉があります。エコロジーという言葉を初めて作り上げたのがヘッケルです。現在の中学生や高校生が生物で習う参考書に紹介される、「個体発生は系統発生を繰り返す」という発生反復説もヘッケルが唱えました。それから、生物が進化してきた道筋を形で表す、系統樹をきちんと提示したのもヘッケルです。ヘッケルは、進化論の普及に大きく貢献した人として有名です。

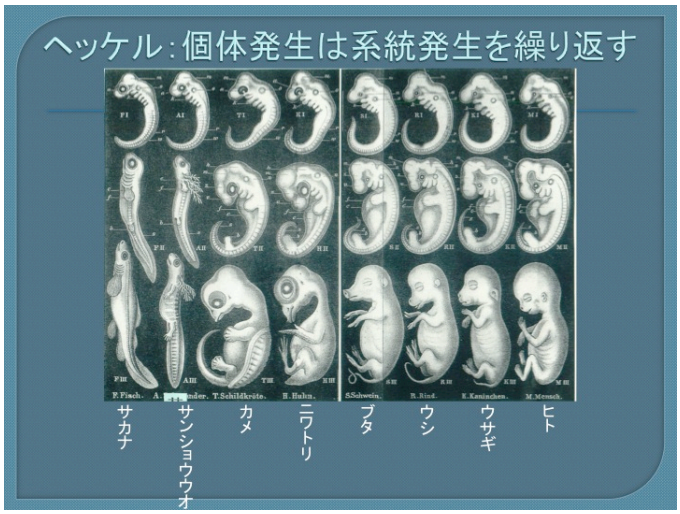
図はヘッケルが「個体発生は系統発生を繰り返す」と言った、その大変魅力的な図です。いずれも脊椎動物で、左の方から魚、サンショウウオ、両生類、それからハ虫類、鳥、右の四つは哺乳類で、ブタ、ウシ、ウサギ、ヒトで、それぞれの個体発生の過程を見ると、初期の段階はいずれも非常に似ているが、生まれてくる時には形が変わっている、ということです。例えば人が発生していく途中では、魚と同じような形をしている時があり、人間にも喉のところにエラがあります。魚が一番栄えた時代は、4 億年ぐらい前ですけど、それを人間は 300 日ぐらいの間に短縮したかたちで繰り返す、と言ったわけです。

この説は、日本にもかなり早い段階に紹介されております。丘浅治郎という人の明治 37 年に出た『進化論講話』という本で、先ほどのヘッケルの「個体発生は系統発生を繰り返す」が紹介されています。

ただし、ヘッケルは進化論の普及者だったけど、「個体発生は系統発生を繰り返す」という法則は成り立たないし、例外はいっぱいある、というのが科学的な評価です。しかし、法則として成り立たなくても、実際に繰り返すように見えるのは事実なわけです。例えば『ヒトのなかの魚、魚のなかのヒト』という 2008 年に出た本や、『個体発生は進化をくりかえすのか』という 2005 年に出た本には、最先端の科学でもヘッケルの発生反復説を非常に魅力的なテーマとして扱っています。なぜ繰り返すように見えるのかが、分子生物学のレベルで解明されつつあって、今はエボデボという進化発生学という分野で研究が進められています。

現代の自然観

今、私たちは自然をどう見ているのか、人間が自然とどう付き合うか、ということで、自然科学だけではなくて、哲学的、思想的な部分も関係してきます。まず生物界の系統ですが、一番上のモネラ、いわゆる原核生物と言われている核膜がない生物です。それから、原生生物、つまり核膜のある生物、さらに菌類、植物、動物がバラバラではなく、つながりがあります。俗な言葉ですけど、「われら動物みな兄弟」というのは、人間は他の生物と断絶していなくて、私自身も皆さんも母親の胎内にいる時には魚の時代も経てきて、4 億年



の歴史を私たちの体の中に短縮して繰り返しているというものです。魚は人間に比べたら下等だとか、サルは人間に比べたら下等だ、人間の方が高等だという上下の関係というよりは、私たちは皆兄弟で、むしろ魚の方が大先輩で、人間は一番新参者だと、いう見方も存在するわけです。

私たちは、何気なく呼吸していますが、酸素が空気中にあるのは、言うまでもなく光合成生物のおかげです。そういう中で、最近言われていることが生物多様性で、同じ種類の生物の中でも遺伝子の形がたくさんあり、あるいは違う種類の生物がたくさんあるという見方です。それらが集まった生態系がたくさんあります。山の生態、海の生態、川の生態、森林の生態、それらが多様に存在して、その多様性を保っていくことが大切だということが今言われています。

それからもう一つ、自然科学的というより倫理的な問題ですけど、新しく環境倫理、人間は自然とどう付き合うか、ということも 21 世紀の新しい課題として浮かび上がっております。それは、①自然の生存権、他の動物や植物は、人間が利用するのが当たり前だから、勝手に殺していいということではなくて、それぞれの生物には生存権があり、そういう中でどういう風に人間が利用させてもらうかを考えなければなりません。それから、②世代間倫理、私たちの世代だけで食いつぶしてはならず、子どもや孫の世代まで良い環境、生物の多様性を引き継いでいかなければならない。それから、③地球全体主義、日本は先進国だから、お金があるから何でも買ってくればいいということではなく、日本に比べて経済的に恵まれない人たちの立場や地球環境も考えなければならないと、今言われています。

進化論に対する現在のキリスト教などからの反応

進化論に対して、現在のキリスト教からどんな反応が出ているか。1996 年、今から 13 年ほど前に、ローマ法王が進化論を認めました。これはダーウィンの進化論発表から 137 年目で、画期的なことでした。2008 年には、イギリスの国教会が、当時進化論を否定したことは誤りだったと、ダーウィンに改めて謝罪をします。ダーウィンの進化論は、ダーウィンが 50 歳の時に発表したので、『種の起原』は今年で 150 年ですが、ダーウィンの生誕でいうと 200 年にあたります。ダーウィンの生誕 200 年にあたって、イギリスの国教会が進化論を否定した誤りを認め、ダーウィンの名誉回復がなされているそうです。

ところが、アメリカはだいぶ様子が違います。2007 年の新聞では、見出しに「進化論否定　聖書の世界」とあって、アメリカに天地創造博物館ができたという記事です。ケンタッキー州に大がかりな天地創造博物館、つまり聖書の世界で、自然環境を理解する、という大きな博物館が作られました。アメリカでは教育界でも揺れ動いて、進化論を学校で教えてはいけないという PTA の圧力が非常に強い所が多く、進化論を教えてはいけない、という州の法律ができて、それか連邦の法律に違反する、ということが比較的最近、20 世紀の終わりぐらいになっても行われておりました。アメリカでは、世論調査によると、進化論を信じている人はまだ 50%に満たず、半分以上の人は天地創造の方だ、と言われているわけです。昨年時点のブッシュ大統領も、「進化論否定　聖書の世界」の人たちから支援してもらっているので、進化論を学校で教えてもいい、しかし、それと同じぐらいの時間、天地創造の話も科学の時間にするべきである、とブッシュ大統領は表明していた、と新聞記事では伝えられています。

樹霊供養の塔という塔が、北海道の石北峠、国道 39 号線で旭川から層雲峡を超えて北見に抜ける峠に立っております。1954 年の洞爺丸台風でたくさんの風倒木が大雪山に出て、風で倒れた木がかわいそうで、その霊を慰めようと、地元の人たちが建てた塔があります。これがアメリカのある新聞に、“Believe It or Not !”、“これ信じますか、信じませんか”というクイズ欄みたいなものに紹介されました。私がかつて北海道の職員の頃、北海道知事宛てに、「アメリカのある新聞の“Believe It or Not !”に、こういうことが紹介されました、しかしとっても信しられません。本当にこういう樹木慰霊碑が建っているのか、調べて下

さい。」という手紙が来ました。私が返事を書いた覚えがありますが、アメリカ人の常識ではこういうことは信じられないようです。記事には、「大雪山国立公園の中に、台風で死んだ人のためではなく、倒れた木の魂を慰めるために、メモリアルが建っている」ということが書かれており、アメリカの新聞に載り、大きな反響があるというところに、自然観の違いが感じられると思います。

日本はどうだったかと言うと、貝原益軒という江戸初期の儒学者で本草学者だった人は、「草や木には情けなし」、情けなしとは心がないということで、草や木には心がなく、精神がないけれども、「人と同じく天地の気を受けて生ず」、したがって「鳥獣草木までも憐れみ恵みて、そこなわず。鳥獣が殺され、草木がみだりに切られるのを見ても、いたむ心あるは、みな我と一体なればなり」と書いています。日本の仏教のお経には、「山川草木ことごとく仏性あり」、つまり草や木でも仏心を持っていて、魂がある、と言われ、「殺生禁断」と、私たちが子どもぐらいの時までは、よく教えられました。日本人は、さきほどダーウィンの進化論で、「我ら動物みな兄弟」と言いましたけれども、ここで、「鳥獣の殺され、草木がみだりに切られるのを見ても、いたむ心あるは、皆我と一体なればなり」ということに通じていると思います。そういう意味で、日本では進化論を受け入れるのに、抵抗がなかったと思われます。しかし、日本は自然破壊をしないで開発を進めたのだろうか、ということを考えてみましょう。

先住民族アイヌと北海道開拓の関係

北海道の開発、開拓がどう進められたかを見てみたいと思います。1934 年の藤田元春の『新日本図帳』という、今の高校の社会科の地図帳よりちょっと詳しくした程度、道路マップなどよりははるかに詳しくない、100 万分の 1 の地図があります。東北海道の部分を拡大して見てみます。

釧路から厚岸の間の海岸線に、アイヌ語の起源の地名がいっぱい並んでいます。難しい漢字が並んでいて、普通の人には読めない地名が未だに存在しますが、アイヌの人たちは北海道の先住民族で、北海道の地名の大部分はアイヌ語に由来しています。それに対して、兵庫、宮城、新潟、山形、岩手、長野、岐阜、という地名が書かれている部分があります。これは、長野とか新潟とか岩手とか岐阜とか、そういう県からそこに移住時、個人としてではなくて、集団で渡ってきて、そこに農業集落を形成したことが 1934 年の地図ではっきりと読み取れます。それは釧路湿原の北の方、今でいうと、鶴居村から標茶町にかかる部分で、現在の地図ではこういう地名はなくなっていますが、70 年前の地図ではそういうことが分かります。

明治の末から大正の初めに北海道に渡ってきた人たちの出身地県別の番付があり、それを見ると、東の横綱は宮城県、西の横綱は青森県、東の大関は富山県、西の大関は新潟県です。沖縄も含めて

日本全国から移民して、開拓したわけです。したがって、アメリカは合衆国と言われますけど、北海道も合衆国です。

二風谷ダムを建設をするとき、北海道開発局が土地収用法でアイヌが大切にしている土地を強制収用しました。それが裁判になって、アイヌ民族は先住民族であり、アイヌの聖地をダム建設のため土地収用したのは誤り、と 1997 年に判決がありました。また、1899 年にアイヌを対象とした旧土人保護法ができ、1997 年にはその旧土人保護法が廃止され、アイヌ文化振興法という法律になっています。

昨年洞爺湖でサミットがありましたが、それまで日本政府はアイヌは先住民族ではない、日本は単一民族国家である、と言っていましたが、アイヌは先住民族だということを、洞爺湖サミットの直前に、衆議院、参議院が一致して決議をしました。今まで北海道の開発の中で、アイヌの先住民族性というのは気にされていませんでしたが、そういうことを今は考慮しなくてはならない時代なのです。

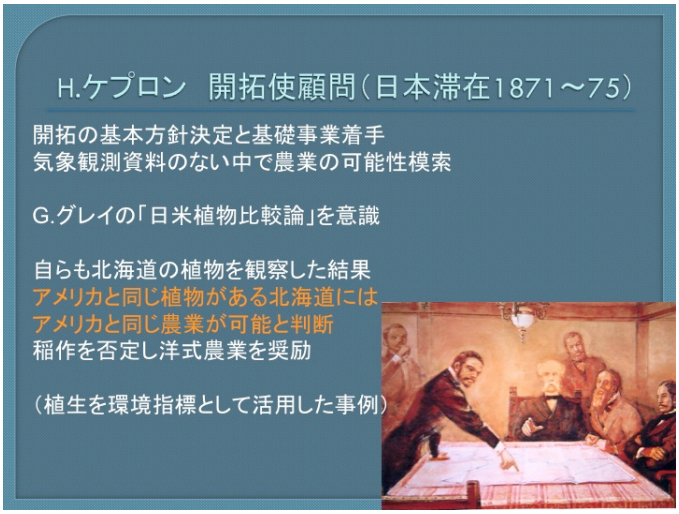
欧米的農業ランドスケープの成立

そういう中で、北海道の開拓が始まりました。斜里町に、津軽藩士殉難慰霊の碑があります。江戸末期に津軽藩士が、北方警備のために、斜里でひと冬過ごし、百人のうち八十何人の方が犠牲になって死んでしまったのです。だから寒い蝦夷地は日本人に向かない、というのが明治になるまでの日本人の理解でした。

明治になると、開拓使の顧問としてケプロンがアメリカから招かれました。ケプロンは北海道の開発の可能性を考えなければならなかったわけです。北海道は寒くて開拓できないという情勢の中で、どういう判断をしたかというと、ここでグレイの先ほど言いました、日本とアメリカの植物は似ているという説を、ケプロンはちゃんと勉強していました。ブレークという幕末に萱沼炭鉱に来ていたアメリカ人の手紙の中に、「北海道の植生は、グレイが言っているように、アメリカと似ている、ということを証明しています」と書いています。そういうものを読んだ上で、ケプロンは札幌に来ると、ニレ、カエデ、ヤチダモ、ナラなど、アメリカのふるさとの木と完全に一致していると『ケプロン日誌』に書いています。したがって、「アメリカと同じ植物がある所には、アメリカと同じ農業ができる」、ということで、当時の日本人は、北海道は寒くて住めないし、農業もできないだろうと思っているところで、開拓使を指導して、アメリカ式の北海道開拓が進んだわけです。

『北海道移住手引草』というパンフレットには、北海道はこんなところですと案内をしています。その中で、植民地区画が紹介されています。農村に碁盤目状の土地区画をしたもので、現在の北海道の農業的なランドケープは、この区画が基本になっており、これもアメリカ西部開拓のタウンシップ制にならっています。

それで、開拓使は北海道ではお米をつくっちゃだめだ、西洋式の農業をやりなさい、という指導しましたが、農民としてはお米への愛着が断ち切れない。「寒地稲作この地に始まる」という記念碑が、北広島の島松にあります。中山久蔵という人が始めた寒地稲作ですが、皮肉というか面白いというか、実はお隣にはクラーク先生が“Boys be ambitious.”と言った学生たちと別れた、記念碑が建っています。クラークはお米作りを否定し、そういう中で農民魂でここから寒地稲作が始まりました、という記念碑がお隣同士並んでいるというのは、北海道のランドスケープ考えるときに非常に興味深いと思います。稲作がどういうふうに



進んだかというと、1920 年代には宗谷とか釧路、根室の方まで拡大しました。しかし、昭和の初めに冷害が繰り返されたので、それ以降はだんだん撤退し、今の北海道では、西洋式のランドスケープと田んぼのランドスケープが同居しています。

そうした中、広々したいかにも北海道らしい農業ランドスケープで魅力があるのは、やはり道東の牧場とか、富良野の丘のある風景などが中心で、西洋式の農業が基盤になっております。

荒っぽい開拓方法とその反省

北海道の開拓は、原始林の伐採から始まりました。しかし、原始林を伐採して農地にする時は、伐り方が非常に荒っぽいし、また土地はタダだったので、かなり環境が荒れてまいりました。農業をする場合にも、原始林が培った土壌は肥沃なので、肥料をやらなくてもけっこう収穫できました。肥料をやらないで連作すると、地力が減退するということが明治の開拓時代に各地で繰り返されました。

明治 30 年代に、河野常吉という当時道庁の職員だった人が、道庁長官に献言書を出しています。北海道の国有未開地をタダであげます、という政策に対して、「これは山師のやからのためにどんどん食い荒らされている、その食い荒らされる勢いは、実にその凄まじさをきわめ居れり。北海道の農業は天然の地味を荒らしつつあるのみ、牧畜業は天然の草を荒らしつつあるのみ、天然の良い林は不経済的に伐り荒らされて、海や川の魚も次第に減少する傾向がある」「年々掠奪して補充せず、また憂うべきにあらずや」と長官に献言しました。現在私たちが地球環境を考える際に言う、持続可能な開発を提言しました。

ほぼ同じ頃、明治 30 年代半ばに浅羽靖（あさばやすし）という人が、北海道旅行倶楽部をつくりました。「しずか」と読むのが正しいそうですが、浅羽靖さんは現在の北海学園大学、その前身の北海中学校を設立した人で、国会議員もやりました。「拓殖奨励の結果、100 年の年月を経て再びなお得難い良林を乱伐している。今にして之れに注意を加えなければ、ついに湮滅空虚、後の人に後悔の念を残さしめる」と考え、自然保護活動、環境保護活動をやる北海道旅行倶楽部を作りました。私がここで言いたいのは、今の地球環境問題も同じですが、開発が行き過ぎるとこれではいけない、という反省が生まれてきて、いかにして自然と共存するかという考えが出てくる。これが健全な姿だということです。

明治時代から大正の初めぐらいのほぼ 50 年の間に、北海道の平地の大部分は、森林が伐採されて農地に変わりました。

野幌森林公園については、その森林が残されたのは、『北征日乗』という日誌に、関矢孫左衛門という人が書いています。野幌の森林も地元の町村に払い下げられそうになり、関矢孫左衛門を中心とする人たちは、野幌の森林が水源を涵養し、その水を引いて水田をつくっていました。「樹林伐採されるは捨て置き難き一大事なり」として、野幌の森林が伐採されてしまえば周りの農業が成り立たない、ここの水源は非常に大切で、森林を守る運動をして、結果的に守られました。それが現在の野幌森林公園につながっています。

北海道の公園はゼロからの出発

そういうふうに環境を守ろうという中から公園も生まれてきたわけですが、本州方面の公園は、最初、1873(明治 6)年の太政官布達により、江戸時代の歴史的遺産、神社仏閣の境内、お城の周りと

か、そういう「古来の勝区」が公園に変わったのが出発点です。ところが、北海道にはそういう公園に代わる歴史的遺産はありませんでした。

そこで、北海道の公園はゼロからの出発ですが、1894（明治 27）年に北海道庁が、内務省に「北海道の如き新開の地にありては古蹟名勝の地に限り公園地と定むるが如きは望むべからざる所、然るに遠来の移民をして永住の念慮を深からしめ、まさに旺盛ならんとする市街を発達せしむるには、自ら彼らの心目を喜ばしめ、旅情を慰めるに足る公園を予定しおき、漸次これを新設するは必要の一手段と存じ候」と照会しています。つまり、北海道は公園予定地を定めて、残して、それをだんだんと公園にしていく必要があると内務省に申し出て、了承を得ています。

そのことが一番典型的に表れているのが、名寄公園です。名寄が植民地区画された時の地図には、真ん中に市街地が碁盤目状に入り、その中心が名寄の駅です。旭川から鉄道が延びてきて、駅ができる予定地で、－現在の名寄の市街地もここを中心として発展しました。すでに公園予定地が設定されており、土地区画の一番最初の段階から公園が市街地に接続して予定されて、それが現在の名寄公園になっています。

先ほど函館が今年開港 150 年だと申し上げましたが、函館公園もまた、極めて異なった生い立ちを持っています。今年同じく開港 150 年を迎える横浜や神戸は居留外国人が非常に多く、日本政府との条約の中で、公園を設置することが決められていました。ところが函館は居留外国人が少ないので、条約にそれがなかった。そこで、居留外国人が困って、イギリスの領事ユースデンという人が、函館市民の有力者に、立派な都市には立派な公園が必要で、私もお手伝いしますから、あなた方自身で公園をつくりませんか、と働きかけました。その働きかけを受けた中心人物が渡辺熊四郎という人で、市民の間に公園づくりの世論が広がり、多くの住民の労力奉仕により函館公園ができました。

1879 年に開園し、公園の入口にロータリー型の花壇があります。この花壇の真ん中の噴水は新しいですが、ロータリー型花壇は最初から作られていました。つまり、最初から洋風デザインが入っていた。函館の公園の中には博物館があり、これも建物としては歴史的文化財に指定され、いわゆるカルチャー・パークのさきがけだったわけです。公園は役所が作ってくれるのが当たり前の中で、空前絶後というべき住民主導型で、－住民がみんなで汗を流しながらこの公園をつくりました。さらに、公園デザインの基本的なレイアウトは、今もほとんど変わっていません。函館公園は、日本の公園の中でもきわめてユニークな歴史を誇るもので、公園自体が歴史的な文化財の価値があると私は考えております。

函館公園が開かれる時に、先ほど言いましたユースデン領事が後押しし、ユースデンの奥さんが、公園の開園を記念して、ライラックとセイヨウクルミを寄付して植えました。そのライラックは残念ながら枯れてしまったのですが、そのひ孫にあたる、つまりひこばえを分けてもらって、育てていた人が分かっており、それを函館公園に里帰りさせて、イギリスから来た北海道で一番古いライラック、その DNA を受け継いだものが函館公園に再び蘇ったと話題となりました。

公園の時代的変化と評価の必要性

横浜と神戸は居留外国人から公園整備の要請があったと先ほどお話しましたが、横浜公園はまさにそうしてできた公園です。横浜公園は、当初は「彼我公園」と呼ばれていました。「彼我公園」というのは、彼と

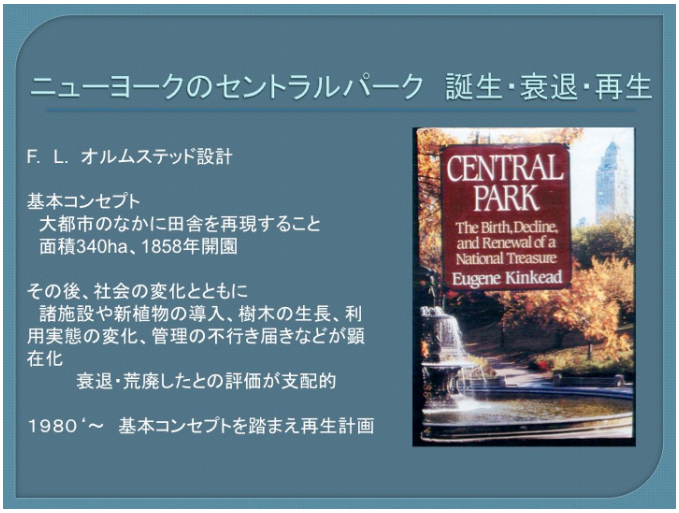
我ということで、外国人と日本人が一緒に使える公園という意味です。当時は、真ん中にクリケットの広場があって、楕円形の園路で結ばれ、洋風デザインでした。函館公園は、当初のレイアウトがほとんど変更されないで今も受け継がれていると言いましたが、横浜公園は全く受け継がれていないのです。一番目立つのは、野球場です。都市公園法で、運動公園以外の公園では、野球場は2%しか認められませんが、5%までプラスしていいと、当時は決まっていました。図面で見る限りは7%に収まらず、都市公園法違反をしているわけですが、そういう実態に残念ながら横浜公園はなってしまっていて、歴史的遺産が受け継がれていません。

札幌の円山公園、大通公園、中島公園は、明治の初めおよび中頃から、公園として意識されて、少しずつ整備をされてきました。明治 40 年代に、長岡安平という当時の東京市の方に基本デザインをお願いしたことが注目されます。したがって、ちょうど今年あたりから、100 年をそれぞれが迎えるわけです。100 年前と今とは、変わってきている所がたくさんあります。公園の中身も変わっているし、周りの社会的なニーズも変わってきているわけで、これから改めてどうしたらいいだろうか、ということを考えることが非常に大事になっています。

アメリカのニューヨークのセントラルパークを案内した本の表紙には、“Birth”誕生、“Decline”衰退、それから“Renewal”再生、というサブタイトルがついています。普通、歴史的なものを扱うと、誕生して成長しました、発展しました、というのが一般的だと思いますが、この場合は誕生して、衰退したと言っています。そこで再生しましょう、ということです。100 年余りの歴史を経る中で、植物が変わってしまったり、いろんな施設がいろんな要求で入ってきたり、管理が不行き届きだったりして、衰退してしまった。原点に立ち返ってもう一回再検討しようということが、1980 年代から行われて、今その再生の途上にある、ということです。北海道の公園も歴史が古い所については、そういう見直しが必要になってくると思います。

北のランドスケープ・その他の課題

北国の住宅は、都市の緑化、街のランドスケープを美しく保つという点では、非常に有利な条件を備えています。本州のある有名な大邸宅で、大庭園を持っている所は、周りが塀で囲まれて、外を通る人は全く中の庭園を見ることができません。北国の住宅は寒地住宅ですから、本州のような縁側があって庭と接するということはありません。例えば恵庭市恵み野の住宅では、塀で囲まれていないので外から眺める人にとっては非常に眺めやすい、そして街並み形成という意味でも、庭の花と緑を豊かな街並みにつなげることができる、という特性を持っています。北海道の住宅庭園は、その特性を生かす発展のしかたが必要と思います。



『札幌郡館林風土略記』という、明治 14 年にまとめられた報告書に、藻岩山や円山も示されてい

ます。藻岩山は、四季を通じて植物の状態が美しい、「朝夕この風致を見るもの自ずから胸襟を快爽ならしめ、閔欝を払わざるなし」、きれいな景色を眺めていると気分が良くなって、うっとおしい気分がなくなりますと述べられています。「これ禁伐令のよって起こる所以にして、官民これを守りて斧を入れず」とも書いてあります。明治の初めから、藻岩山・円山は守られてきたわけです。北海道の都市でも、ランドマークになるような自然は大事にしなきゃなりません。

国立公園の土地所有をみると、四国、九州、近畿、要するに西日本、西南日本では、私有地がほとんどです。それに対して、北海道は国有地が多いです。北海道の国立・国定公園というのは、国有地、これはほとんど林野庁の国有林ですが、これをうまく保護し、利用していくことによって、自然が豊かな国立公園を維持できる。これは本州の公園に比べてはるかに重要な要素、誇っていい要素だ、といえます。

冒頭に申し上げたペリーの黒船の日本遠征記の第二巻に魚の原色図譜があります。その中に、函館でイトウが獲れ、それを調べてみたら新種であることが分かりました。ペリー艦隊が獲ったサケの学名は、ペリーのサケという学名にしましょう、ということで、当時、*Salmo perryi* という学名を付けました。属名が変わりましたが、*perryi* という種小名は現在のイトウにもあてはまるわけです。 150 年前には函館で艦隊の乗組員が片手間に獲った中にも、イトウがいました。それが 150 年経ったら、絶滅寸前になったわけです。北海道でイトウを復活させるのは、やってできなくはないと思いますが、全道くまなくイトウが住める環境の再生は難しいと思います。しかし、これからは生き物と共生できる、都市とか農山漁村とか自然地域、それぞれにふさわしい形での生き物と共存できる環境をつくることが重要と思います。

司会： 150 年のランドスケープの歴史を、多くの資料と、新たな視点も交えてお話いただいて、ありがとうございます。著書の中で、終わりの章に面白い言葉があって、「民唱官随」と書かれていますが、それはどういう意味でしょうか。

俵：「民唱官随」っていうのは、辞書には出てない、私が作った言葉です。夫唱婦随という言葉をもじって、「民唱官随」としました。今回、政権交代が行われましたが、その前の色々な開発は、役所が公共事業の五カ年計画を勝手に積み上げて、その財源を確保して、個々の事業の必要性や効果をあまり詮索しないで、右肩上がりでどんどんどんどん事業が増えていくという状況でした。それらの中には、自然を壊してしまう無駄な公共事業がかなりたくさん見られます。私は北海道自然保護協会にも関係しておりましたので、自然保護協会としては、こんな無駄な事業で自然を壊さないで下さい、と唱えました。それが「民唱」で、その結果、官が従って辞めた、という事例もいくつか出てまいりました。それらを、「民唱官随」と言いました。函館公園の整備の仕方も「民唱官随」で、北海道旅行倶楽部もまさに「民唱官随」です。開発が行き過ぎてくると、おのずからそれを修正しようとする勢いが出てくるのは、古今東西を問わず必要なことだと私は思っています。